

記 録

岡山県自然保護センターにおけるヌートリアの捕獲

岡山県自然保護センター 森 生枝

Trapping of Coypus in the Okayama Prefectural Nature Conservation Center

Ikue MORI, Okayama Prefectural Nature Conservation Center

キーワード：外来種，ヌートリア野生化個体，捕獲。

はじめに

ヌートリア *Myocastor coypus* (MOLINA, 1782) は南米を原産とする水生の齧歯類である。

ヌートリアは岡山県自然保護センターでも上池(図1)を中心にして定着しており、ヒシ、マコモ、ミクリなどを中心とした水生植物の生育に影響を与えている(森, 2003)。また最近では底生動物であるドブガイをも相当数捕食することが明らかになっている(森, 2002)。

こうした現状を踏まえ、センターでは、池の生態系を保全する目的で、2002年にヌートリア対策の方針を定め、2003年より実施に移すこととした。

ここでは、2003年、2004年および2005年に行なった捕獲について報告する。

捕獲にあたっては、岡山県猟友会東備支部佐伯分会会長若林善徳氏をはじめ、会の皆様に大変お世話になった。また諸手続きに際しては、佐伯町産業振興課澤谷眞弘氏にお世話になった。さらに許可申請については、岡山県自然環境課嶋田徳氏、武田保氏にご指導をいただいた。加えて岡山県自然環境課石川誠治氏をはじめ課の皆様には適切なご助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

概 要

捕獲は、許可に基づき、2003年1月6日から3

月31日まで、2004年1月7日から1月31日まで、2005年1月6日から1月31日まで、巣穴が集中する上池を中心に、箱わな15個を設置して行なった。その結果、2003年には10頭、2004年には9頭、2005年には15頭を捕獲し池の生態系からとり除いた。なお、筆者の記録では、各年の捕獲期間終了直後の個体目撃数は、2003年は2頭、2004年は3頭、2005年は2頭であった。

詳 細

1. 方法

捕獲に際しては、三浦(1992)を参考にし、ノネコ用の金属製箱わな(30×30×75cm, 約4kg, 岡崎産業株式会社製)15個を用い、において誘引するため、餌(わな餌)として人參を縦に二つに割ったものを使用した。

上池(周囲約530m, 面積約1.4ha)を中心として水辺に15個の箱わなを設置した。見回りおよび餌の付け替えは、3日に2, 3回のペースで行なった。わなは機械的に置いても捕獲することはほとんどできない(三浦, 1992)ことから、彼らが頻繁に利用し地面が滑らかになっている水際の陸部分をあらかじめ調べておき、そこに設置した(写真1)。

2. 結果

(1) 2003年

2003年は許可期間内に10頭を捕獲した(表1)。

連絡先: fvbs5492@mb.infoweb.ne.jp

性比は、オス：メス = 4 : 6、体重の範囲は、930gから7,300gで、最大値はオスで7,300g、メスで5,270gであった。三浦（1994）に従い、1.5kg以上を成獣、1.5kg未満を幼獣として区別すると、10頭のうち2頭が幼獣であった。ヌートリアは夜行性の傾向が強い（Chabreck,1962；三浦, 1977）ことが知られているが、10頭のうちの少なくとも5頭は日中にわなに入っていた。

主たるわなの設置範囲は、上池北岸東ライン（NE）であった（図1）。

(2) 2004年

2004年は許可期間内に9頭を捕獲した（表2）。性比は、オス：メス = 5 : 4、体重の範囲は、

500gから4,100gで、最大値はオスで990g、メスで4,100gであった。9頭のうち8頭は1.5kg未満の幼獣であった。9頭のうち少なくとも2頭は日中にわなに入っていた。なお、1頭のメスは妊娠中（胎児数6）であった。

主たるわなの設置範囲は、上池北岸東ライン（NE）であった（図1）。

(3) 2005年

2005年は許可期間内に15頭を捕獲した（表3）。性比は、オス：メス = 9 : 6、体重の範囲は、800gから5,100gで、最大値はオスで5,100g、メスで5,000gであった。15頭のうちの7頭は1.5kg未満の幼獣であった。なお少なくとも1頭のメスは妊

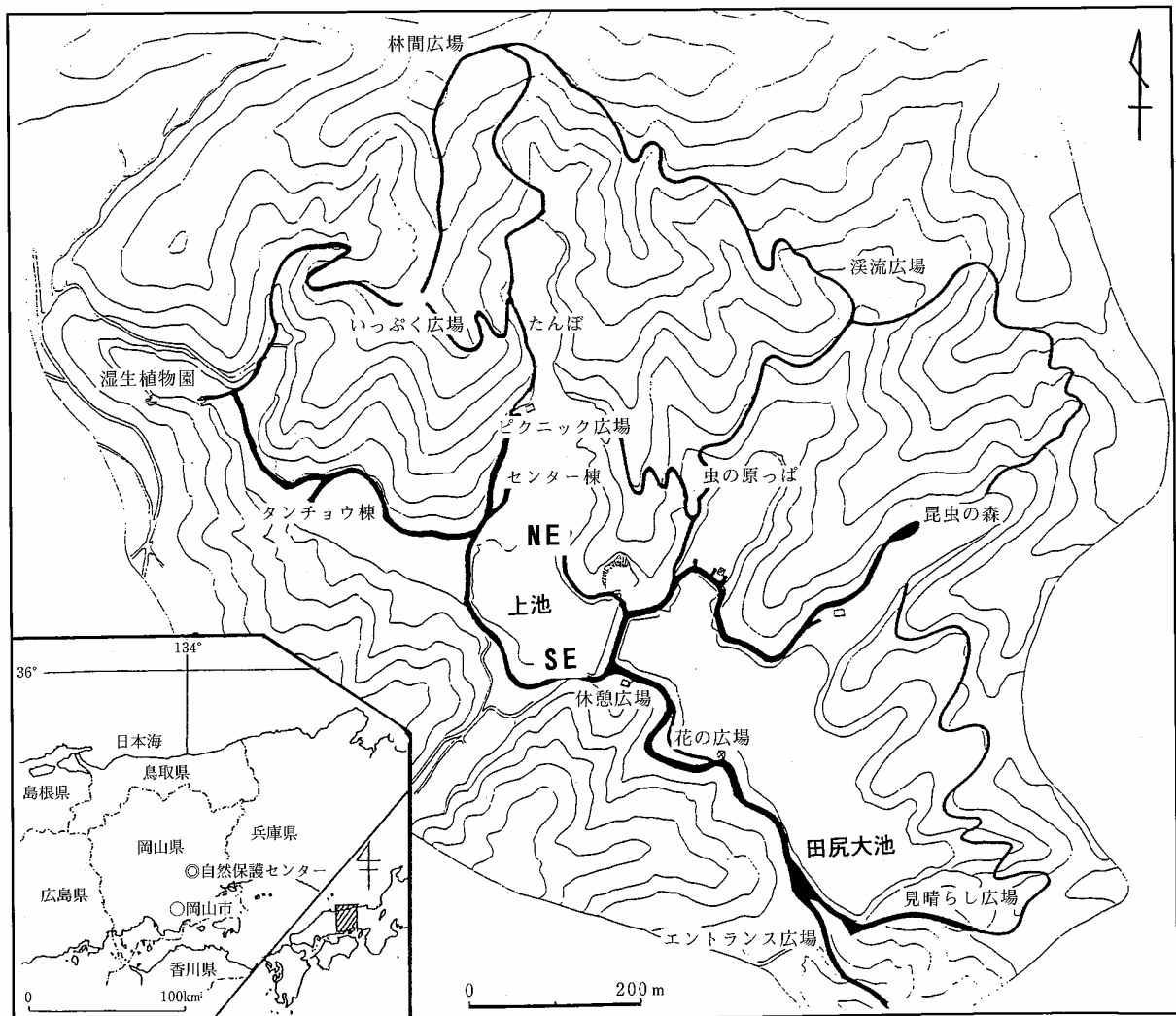


図1. 岡山県自然保護センター(34° 50' 55" N : 134° 3' 20" E)の位置図.

表1. 2003年の捕獲結果

体 重	捕獲数	内 訳
1 kg未満	1	1 ♂
1 kg台	1	1 ♀
2 kg台	2	1 ♂, 1 ♀
3 kg台	2	2 ♀
4 kg台	2	1 ♂, 1 ♀
5 kg台	1	1 ♀
6 kg台		
7 kg台	1	1 ♂

表2. 2004年の捕獲結果

体 重	捕獲数	内 訳
1 kg未満	8	5 ♂, 3 ♀
1 kg台		
2 kg台		
3 kg台		
4 kg台	1	1 ♀
5 kg台		
6 kg台		
7 kg台		

表3. 2005年の捕獲結果

体 重	捕獲数	内 訳
1 kg未満	2	2 ♀
1 kg台	8	6 ♂, 2 ♀
2 kg台	2	1 ♂, 1 ♀
3 kg台		
4 kg台		
5 kg台	3	2 ♂, 1 ♀
6 kg台		
7 kg台		

表4. 各年の捕獲数および全体重

年	捕獲数	全体重(g)	内 訳*
2003	10	34150	成8 : 31920, 幼2 : 2230
2004	9	9630	成1 : 4100, 幼8 : 5530
2005	15	32750	成8 : 24500, 幼7 : 8250

*成：成獣，幼：幼獣の略。

表5. 各年のわな設置期間，わな日数，捕獲数および捕獲個体確認日

	わな設置期間	わな日数	捕獲数	捕獲個体確認日
2003	1/6~1/31(26日間)	357	9	1/8, 9, 10, 10, 13, 13, 14, 16, 16
	2/1~2/28(28日間)	417	1	2/24
	3/1~3/31(31日間)	465	0	
小計	85日間	1239	10	
2004	1/7~1/31(25日間)	334	9	1/7, 7, 10, 10, 10, 17, 17, 17, 31
2005	1/6~1/31(26日間)	225	15	1/8, 8, 8, 9, 9, 9, 9, 11, 12, 13, 13, 14, 14, 15, 15
合計	136日間	1798	34	

娠中（胎児数12）であった。

主たるわなの設置範囲は，上池北岸東ライン（NE）および上池南岸東ライン（SE）であった（図1）。2005年は新たに上池南岸東ライン（SE）をわな設置範囲に加えたところ，このエリアで15頭のうちの6頭が捕獲された。

(4) 3ヶ年を通して

・幼獣の確認について

各年ともに，1 kg未満の幼獣が捕獲されたことから，各年の前年に繁殖が行われたことがわかる（表1～3）。

・捕獲数について

各年における捕獲数は10, 9, 15と比較的似通った数字であったが，捕獲個体の全体重は34,150g, 9,630g, 32,750gであり，2004年の値が著しく小さかった。これは2004年に捕獲された9頭のうちの8頭が幼獣であったためである（表4）。

・わなの設置箇所について

2003年および2004年は，主たるわなの設置範囲を上池北岸東ライン（NE）とした。しかし，2004年の捕獲結果を受けて，今後の捕獲効率の低下が懸念されたため，2005年は新たに上池南岸東ライン（SE）も設置範囲に加えたところ，このエリアで全捕獲数15頭のうち6頭が捕獲された（図1）。新たな設置範囲（SE）付近にはヌー

トリアの巣穴が集中している（写真2）。ヌートリアは巣穴を中心とした行動圏をもつ（三浦, 1977）ことから、巣穴近くの休み場は、わな設置場所としては重要であると考えられる。

・わな設置について

各年におけるわな設置期間、わな日数^{*}、捕獲数および捕獲個体確認日を表5に示した。

各年とも1月初旬からわなの設置を開始し、2003年は85日間、2004年は25日間、2005年は26日間、連続してわなを設置した。しかし、2003年は10頭のうち9頭がわな設置後9日目までに、2004年は9頭のうち8頭がわな設置後11日目までに、2005年は15頭のうちすべてがわな設置後8日目までに捕獲された。すなわち、各年とも、わな設置後12日目以降はほとんどヌートリアがわなに入らない状態であった。

わな日数は、それぞれ1,239, 334, 225であった。2003年には3ヶ月間にわたり設置をしたため、値が大きくなった。また2005年には、わな設置後、長期間ヌートリアの痕跡が周囲に見られなかった場所については、わなを撤去し省力化を図ったため、値が小さくなった。

* わな日数とは「わな数×設置昼夜数」の意であり捕獲努力量の指標として用いられることもある（例えば、石井, 2003）。

準備した箱わなの数は15であったが、鳥獣保護法に基づく捕獲個体の確認手続きが終わるまでは、箱わな内に捕獲個体が入っていたため、この分は設置が不可能であった。また破損したわなは修理が完了するまで設置ができなかった。そのため、この値は単純に「15×設置昼夜数」にはなっておらず、その値を下回る。

3. 補足

・混獲について

沖縄島北部におけるマングース対策において棚原（2002）は「かごワナによって636頭のマングースを捕獲した際、マングースのワナには、マングース以外にもネコ（456回）、クマネズミ（714匹）、アカヒゲ（98回）、ヤンバルクイナ（11回）その他多数の動物が混獲された」（棚原, 2002）と報

告している。ちなみに、沖縄島北部におけるマングース捕獲において、小倉ほか（2002）は「マングースの捕獲はスルメを餌とした箱ワナあるいはカゴワナを用いて行った」（小倉ほか, 2002）と報告している。

センターにおけるヌートリア捕獲に際しても、ヌートリア同様に水辺を利用する動物、たとえばホンダタヌキ・イタチ類・バン・カモ類などが混獲されることを懸念した。しかし、3カ年にわたる捕獲に際しては、他の動物はまったく混獲されていなかった。

ただ、2004年に設置したわなの一つにおいて、数日間、ネズミ類などによると推定される餌のかじり痕が見られたことはあった（写真3）が、彼らは格子の目から自由に入出入りしたと思われた。また、2003年の捕獲時に、試みとしてアジ類の干物をわなの一つに仕掛けたところ、小動物が入り餌を食べた後、網目を押し広げて自力で脱出した形跡が見られた。隙間の大きさから判断してイタチ類などの可能性が考えられた。

これらのことから、3カ年の捕獲結果を見る限り、今回用いた金時人參は、他の動物が全く混獲されなかったという点で、きわめて良好なわな餌であると考えられた。なお、今回の捕獲作業にあたっては、混獲による非対象種の死亡等を防ぐために生け捕り用のわなを使用したが、混獲されてわなの入り口が閉じると対象種の捕獲も不可能になることから、混獲を予防することは対象種の捕獲効率を高める上でも重要だといえる。

・わな餌について

三浦（1992）は、箱わなによるヌートリア捕獲時の餌として「人參の他にもリングオやジャガイモなども試みたが、人參でのみ捕獲できた」（三浦, 1992）と報告している。今回はこれに従い、人參を用いることにし、特ににおいて誘引することから、金時人參を選んだ。2003年3月下旬には市場の端境期となり金時人參が入手できなかったため、西洋人參も試したが、捕獲の確認はなかった。使用した西洋人參は、金時人參に比べて水分が多く、風にさらされると比較的短時間で乾燥してしまったことから、一昼夜野外に置いてわな餌とするには不向きであると思われた。

・他の動物への餌付け効果防止について

餌は3日に2, 3回のペースで新しいものに取り替えた。その際、他の動物への餌付け効果ができる限り防ぐため、古くなった餌はすべて回収した。ネズミ類などによると推定された細かなかじり屑も極力拾い回収した。

引用文献

- Chabreck, R. H. , 1962. Daily activity of nutria in Louisiana. J. Mamm. 43 : 337-344.
- 石井信夫, 2003. 奄美大島のマングース駆除事業—とくに生息数の推定と駆除の効果について—. 保全生態学研究 8 : 73-82.
- 三浦慎悟, 1977. テレメトリー法によるヌートリアのホームレンジの推定. 文部省科研費一般研究報告書「動物テレメトリーの現況」(動物テレメトリーグループ編). 22-26.
- 三浦慎悟, 1992. ヌートリアの捕獲法. 哺乳類科学31 (2) : 145-146.
- 森 生枝, 2002. ヌートリア野生化個体によるドブガイの大量捕食. 岡山県自然保護センター研究報告 (10) : 63-67.
- 森 生枝, 2003. 岡山県自然保護センターにおけるヌートリアの食性. 岡山県自然保護センター研究報告 (11) : 49-58.
- 小倉 剛・佐々木健志・当山昌直・髙原建二・仲地 学・石橋 治・川島由次・織田銃一, 2002. 沖縄島北部に生息するジャワマングース (*Herpestes javanicus*) の食性と在来種への影響. 哺乳類科学41 (2) : 53-62.
- 棚原憲美, 2002. 沖縄県におけるマングース対策の現状と課題. 「外来種ハンドブック (日本生態学会編)」。20-21. 地人書館, 東京.

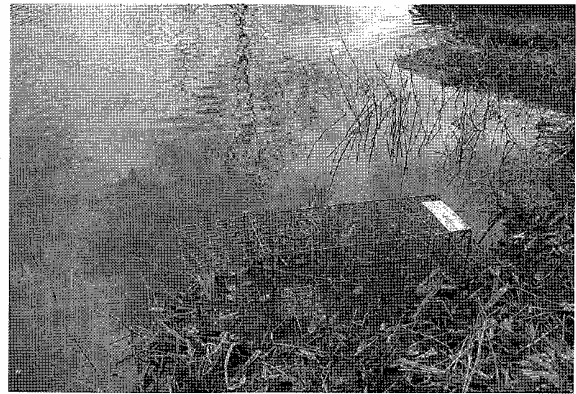


写真1. ヌートリアは頻繁に陸に上がるため、彼らがしばしば利用する場所は地面が滑らかになっている。箱わなはこのような場所に設置した。



写真2. ヌートリアの巣穴。池の土手に横穴を掘っている (上池南岸)。



写真3. ネズミ類などによると推定される餌のかじり痕。倒れた草の上に箱わなを設置したため、底面にすき間が生じ、そこから小動物が侵入したと考えられる。トンネル状の穴が明瞭に見える (2004.1.21)。